

## 柳田國男の「学問」における信仰研究の位置

関 口 敏 美

柳田研究は、一九六〇年代以降、多彩な問題関心・問題視角から行われてきた。例えば、中村哲の先駆的な柳田國男論『柳田國男の思想』（一九六七）は、それ以降の柳田研究に多大な影響を与え、「柳田國男の民俗学の中心課題は家を単位とする祖先崇拜であ」り、「祖先崇拜が彼の思想の核をなしている」という指摘は、ほぼ通説となっている。その後七〇年代に至り、多くの柳田國男論が展開されるが、それらも大筋では中村の主張を踏襲している。しかしなぜ柳田が「家の永続」や固有信仰にこだわり、「民俗学」の内容としてそれらを研究したのかという点については、十分に検討されてきたとはいえず、「家の永続」や祖先崇拜の問題は、彼自身の願望であるとか、「学問」に先行する価値であるとか説明されてきたにすぎない。そこで本報告は、柳田が何のために信仰研究を行い、何を明らかにしようとしたのかを解明する作業の中間報告として、①柳田の「学問」における信仰研究の課題意識について考え、②信仰研究を「学問」の中心とみなす説に対して「中心」であることの意味を問題にする。

柳田は、初期の民間信仰研究を通して、信仰の対象物である小祠・塚・樹木、漂泊的な宗教者、俗信等を多面的に取り上げ、民衆の先祖についての考え方の多様な側面を明らかにしようとしていた。当時は、従来の農業経済学でも土俗学でもない「農村生活誌」によって、農村生活の全般的な把握をめざしていた。そして

信仰生活に反映された「多数民衆の心理」を通して、農民は何を願い何を恐れたのか、なぜ信仰を必要としたのかということ問い続け、豊作祈願や疫病の予防、害虫の駆除、目に見えぬ外敵からの保護等、生産活動に密接に結びついた信仰が、国民生活の重要な役割を果たしていたことを明らかにした。この意味で信仰研究は、近代的な農政学理論の普及・啓蒙では地方の現実が変らぬことを痛感した柳田が、農民の「本来」や平民の生活感情をふまえた政策を実現するために着手した、彼の「学問」の新しい展開であった。

すなわち柳田は、一九一〇年代を通して民間信仰や地名の研究等を行い、〈経済と信仰〉を軸として農村生活を明らかにしようとした。そして信仰生活に主眼を置きながらも、農村の経済的な条件の変遷―生産、分配、労働組織、交易、土地所有の歴史等―の解明をめざし、特に一九一〇年代後半以降は、信仰生活に現れた人々の「労苦の痕跡」に注目して、「勤労の上に勤労を積み重ねて拾え上げた今日の農村其自身」の「歴史」を解明しようとした。つまり信仰生活の痕跡が、「或時代の社会事情に基づく一定の約束制限」下での、精一杯の選択であり努力の結果であると考えたのである。この意味で、信仰研究は、「平民の歴史」の探求に手がかりを与えるものだともみなされ、『日本農民史』（一九二六）『都市と農村』（一九二九）、『明治大正世相篇』（一九三二）等の成果が生み出された。

ところで多くの先行研究が注目する「家の永続」の問題には、どのような意図が込められていたのだろうか。「塚と森の話」（一九二二）では、代々の無名人の「子に対する感情」に「先祖の計画」や「先祖の意思」が込められていると述べ、将来の計画立案

には「歴史」を参考にして、先祖(『過去の人々』)の意思を継ぎ、子孫(『未来の人々』)の幸福をはかる必要があるとした。つまり「家の永続」の問題は、現在の利害のみによって未来の人々の幸福を奪ってはならないという柳田の「歴史」観と関わっている。すなわち柳田は、「歴史」の主人公としての責任・主体性を自覚し、過去・現在の判断や選択が未来に影響を及ぼすことを意識して、常に確かな選択を行うべきことを強調したのである。要するに「家の永続」という問題は、それぞれの時代に何を選択し、どのような制限を受けていたかを「歴史」から学び、可能な限り正しい選択を行って未来を計画すべきことを主張したもので、人々の「生活の永続」を意味していた。

このような理解に立てば、祖先崇拜『固有信仰の解明が「民俗学」の究極的な目的であるとする見解を、そのまま受入れることはできなくなる。柳田が信仰研究に着手したのは、「彼らの本然」「農民心理」「人情」を説明して民衆の生活感情を知り、根底において人間の思考・行動を支配している観念や価値基準を探索するためであった。『郷土生活の研究法』(一九三五)では、多くの制度の奥底にはこれを支持する者の「古い感覚」があって、現在に至っても人々の行動や思考を支配していると述べている。この意味で、柳田は、全ての面にわたって「底の動力」として働く心意現象・信仰の研究を特に重視し、信仰研究が平民の生活史全体を理解する上で不可欠の作業になると考えたのである。

一九四〇年代に至ると、柳田は、『日本の祭』(一九四二)、『神道と民俗学』(一九四三)、『先祖の話』(一九四六)で、信仰の担い手の必要に応じて固有信仰それ自体が変化してきたことを明らかにした。そして固有信仰の本質が、「公共の福祉」を祈り生活

の永続を願うものであることを指摘した。例えば『日本の祭』では、国民が自分の問題として信仰について考えるためには、国民にとって真の信仰である民間信仰を「民俗学」によって研究する必要があるとし、『神道と民俗学』では、「平民の歴史」を解明するために信仰研究が必要になるのだと主張した。そして『先祖の話』では、「未来の計画」や「訂正」のために過去を知る必要がある、そこに「民俗学」として信仰研究を行う意義があると強調した。

このため柳田は、「民俗学」として信仰研究を行うことにより、信仰がいかなる意味を持っていたのか、今後いかなる機能が不可欠であるか、置き換えが可能ならば何によって代わるべきであるかを探索したのである。柳田によれば、民衆にとって信仰とは、「科学以外の方式によって、その生活上の不安を処理しようとする」方法であり、安心立命の根拠として現在を生きる力を与えるものであった。それゆえ「生活上の不安」を解消するためには、「人生の今後の変化」に見通しをつける「技術」が必要になるとして、信仰に頼らずに将来を計画し自力で生活を切り開く、主体的な問題解決能力の育成をはかる必要があるとした。そして人々が問題解決への見通しを得る際に必要になるものが「歴史」の知識であり、「民俗学」の使命は、「歴史」を説明してそれを知識として提供することだと考えていた。このため「民俗学」の内容として信仰研究を行い、民衆にとつての固有信仰の意味・機能を問おうとしたのである。この意味で、柳田の「学問」における信仰研究は、信仰研究それ自体を目的としたものではなく、民衆生活の「歴史」の解明が重要な目的であったと考えられる。